グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会における壁画の重層構造

江藤　望*

About the Layered Structure of Fresco in the East Cave Church of Gravina di Riggio

Nozomu Etoh*

Only a few of the paintings realized at the time these church were built are still visible today. They are very rare. The paintings have been redrawn many times during the history. A new painting was overlaid on the previous one, when it started to look old. The large part of Italian medieval cave wall paintings in Puglia region, object of this research, suffered bad environmental damages and get lost. But thanks to these damages, it is possible today to see clearly the multiple layer structure of these paintings, and understand the process of their realization.

Gravina di Riggio's east cave church wall painting, in Grottaglie, are extremely damaged too, so it`s possible to learn about their realization process. It`s possible to observe a three layers structure in different parts of the paintings. This report, based on a fieldwork research, is a detailed analysis of the multiple layer structure of these paintings, and a reflection about their realization process.

Key Words: Cave church, Fresco, Layered structure, Reform, Grottaglie, East Cave Church of Gravina di Riggio
キーワード: 洞窟教会，壁画，重層構造，改装，グロッターリエ，グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会

1. 教会壁画の重層構造

教会壁画の多くは，教会が誕生し最初に描かれたものが現在にまで残っているものはほとんどまれで，その生涯において何度も描き直されている．私たちの住まいでも，古くなれば壁を塗り換えたり住人の趣向が変われば壁紙を貼り直したりするように，壁画も時を経て古くなればその上から漆喰を塗り重ね新たに描かれたのであった．

本プロジェクトの研究フィールドであるイタリア中世の洞窟壁画群においては，ほぼ無傷の状態で今日まで存在し続けているものは皆無に等しい．壁画の保存状態は最悪で，日差しや風雨が直接あたり苔やカビが全体に生えているものも多い．また，教会として使われなくなり，盗賊によって破壊されたり農家の家畜小屋になり壁画が傷つけられたりする場合も少なくない．ほとんどが見るに耐えない無残な状態の中，よくぞ何百年の間ここまで耐えぬいたと驚くこともしばしばである．

これらの傷つけられた壁画は，一方で壁画装飾の過去を我々に教えてくれる．描き重ねられた断面部分が明確にあらわれているため，壁画が改装されたその変遷を伝えてくれるのだ．今回の調査地の1つであるプーリア州グロッターリエにあるグラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会（Fig.1）の壁画も，かなり傷みが激しく壁画の図像プログラムを判明することは非常に困難である．しかしその反面，壁画が損傷した断面から過去の壁画改装の変遷をうかがい知ることができる重層構造が，いたるところで確認できるのも事実である．多いところでは3層構造になっている場所も存在する．

Fig.1 グラヴィーナ・ディ・リッジョ東教会

* 人間社会研究域　学校教育系
フレスコ壁画研究センター
* Institute of Human and Social Sciences, Faculty of Education
Research Center of Italian Mural Paintings

本稿では，同教会内に散在する壁画の断片を詳細に調査した結果を基に，その断片に描かれた図像や漆喰の塗り方などの共通点を手がかりに，それぞれが何層目のものであるかを検証する．そしてこの検証結果を基に，過去に壁画がいかに段階的に描かれ教会内が改装されてきたのか，本教会壁画における装飾リフォームの変遷プロセスについて考察を試みる．

2. 壁画の残存状況

2.1 教会の形状と現状

グロッターリエの凝灰岩台地の北側に深く刻まれたリッジョ峡谷沿いに位置する当洞窟教会は，南南西の方角を向き，目の前には峡谷の川底へ続く深い崖が広がる．この地形を生かして横穴式に洞窟が掘られ，リッジョ東教会が建設された．ファサードの壁面には当初，出入口としての空間が中央に1カ所と，おそらく窓としての役割を持つ空間が中央出入口の両脇に2カ所あったと予想される．しかし現在では，そのファサードは大きく崩壊し壁面全体の8割ほどが空洞となっている．外から教会内がほぼ丸見えの状態である．

教会の内部空間はおおよそ横幅 6.5m×奥行き 6.1m×高さ 3.1m の広さで，後陣壁には中央部分とその右側に2つの刳り型後陣が設けられている（Fig.2）．中央部分の刳り型後陣（以後，左祭壇）は横幅 1.7m，奥行き 1.3m，高さ 2.4m で，右の刳り型後陣（以後，右後陣）は横幅 2.1m，奥行き 0.9m，高さ 2.1m である．この後陣は中央の左祭壇に比べると少し小さいものの，掘削時にそのまま掘り残された立方体の石塊による祭壇が中央に存在する．両刳り型後陣ともアーチ状に形づくられ，半球状に掘削されている.正面後陣壁左側（以後，正面左壁面）には刳り型後陣は存在しないが，壇が存在した形跡があり床面が一段高くなっている．また，同壁面の下の方に横一列に連なるこぶし程度の穴が認められるが，これらの穴が教会として使用されていた当時のものだとすれば，木製の祭壇か聖具置き場が設けられていたのではないだろうか．

天井には何の目的で空けられたのか判らない外部と貫通した穴が存在する.大きさは直径 92 cmほどで，おそらく教会が使用されなくなってからのものと考えられる．推測だが，オリーブなどの農産物をその穴から落とし，洞窟を貯蔵庫もしくは精製所として使用されたと思われる.雨天時には教会内には雨水が入り込み，水浸しになることは容易に想像がつく．

このように，当洞窟教会の壁画がおかれている環境も例外ではなく最悪の状態である．壁画は風雨に直射日光，カビ，苔，害虫などの外敵から被る危険に常にさらされている．そのため壁画の状態もかなり重傷で，多くの箇所で図像プログラムを確定することは困難である．特に左右の側壁の入口側に近い部分がまったく確認できない．入口側には当初から壁画は存在しなかったのかもしれないが，後陣壁側のかつては壁画が間違いなく存在した部分も，入口の外部環境にさらされがちな方に向かうにしたがって状態は悪くなっている．

次節では壁面ごとに壁画の残存状況をみていくが，2 割程度しか残っていない入口側の内壁には，わずかに漆喰が塗られた痕跡が残るものの，壁画が描かれていたか判別することは不可能である.よって左右の側壁と後陣壁の 3 壁面について述べる．まずは左側壁からみていくことにしよう．

2.2 左側壁

左側壁は他の2つに比べると壁画の残存状態は最も悪い．壁面に向かって右の後陣側に比較的大きな断片が確認できるほかは，ごく小さいかけらが数カ所散在する．また，壁画の重層構造に関しては，漆喰のみの層と描画層の層構造は確認できたものの，描画層に限っては1層だけであった（Fig.3）．

この側壁の左半分の入口側には，漆喰を塗られた痕跡すら確認できず，凝灰岩の壁体がむき出しの状態である．紫外線や風雨による屋外からの損傷を強く受ける部分であるため，壁画が全壊したのか，それとも当初から描かれていなかったのかは不明である．とはいえ，ここで少し想像力を膨らませてみたい．両側壁の中央下部に掘削された跡(掘削痕 A-1，2) [1] が対になって存在する．左側壁ではそのちょうど延長線上より後陣壁側にしか壁画の断片が確認できないところをみると，その掘削痕はイコノスタシス，つまり祭壇と身廊とを区切る仕切りであった

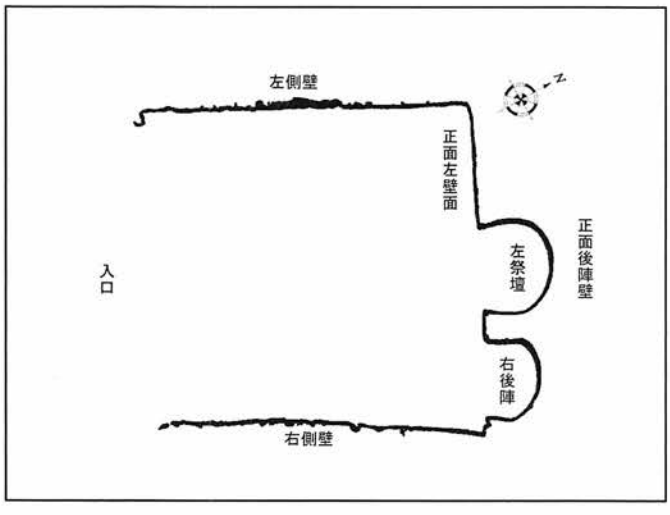


Fig.2　教会内略図

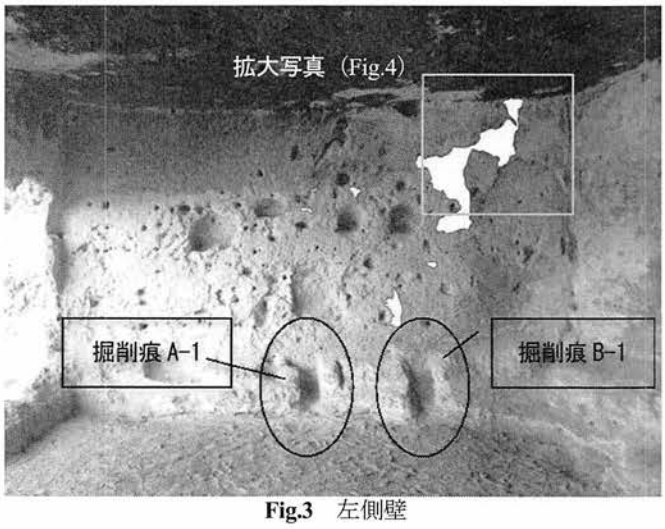


Fig.3　左側壁

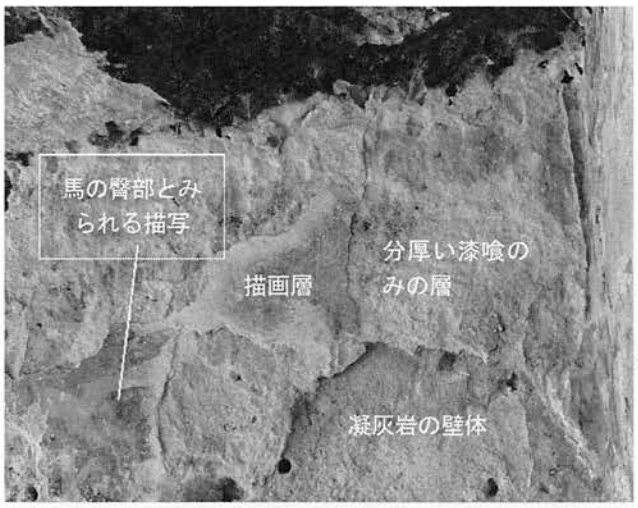


Fig.4　左側壁（右上）

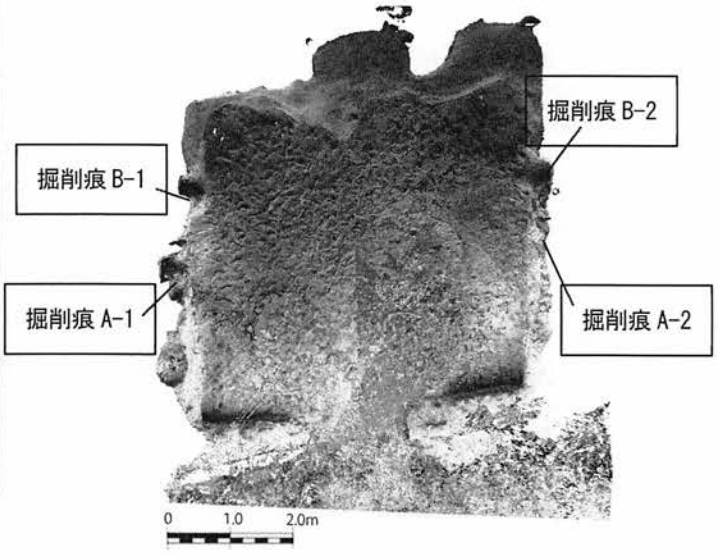


Fig.5　3D スキャンによる堂内の断面図

可能性が高い．もし，これがイコノスタシスの痕跡であれば，イコンで覆われた壁はその掘削痕より祭壇側であったことが想像でき，左半分の入口側には壁画はなかったとも考えられよう．

また，両側壁の後陣壁に近い方に同じような掘削痕（B-1,2）がもう一組確認できる．これも想像の域を超えないが，これら 2 つの掘削痕はイコノスタシスが移動した形跡ではないだろうか．その理由として考えられるのは，信者が増えて身廊部分の空間を広げる目的で入口側から後陣側に移動したのか，もしくは祭壇のイコン装飾を充実させる目的のために，後陣側から入口側に移動したのかもしれない．この件については，壁画装飾の改装プロセスと密接に関わると考えられるため，後に考察することにしよう．

さて，壁画の状態に戻るが，Fig.3 の写真の白抜きで囲んだ部分が壁画の描画層である．その一部に黒い馬の臀部のようなものが描かれている他は，図像はまったく判別できない．また，描画層以外の部分が凝灰岩の壁体なのか，それとも漆喰層なのかの判別も困難だった．全体的に色調や材質感がたいへん似ており，目視で見分けることは不可能であった．層構造のように見えても，凝灰岩が風化によって表面が剥離し，実際には下地層がなく凝灰岩の壁面上に直に描画層を塗って壁画が描かれたことも十分に考えられるので，描画層の真下の層の一部をほんのわずか採取し，帰国後に化学分析をおこなった．分析結果は漆喰 [2] であり，つまり漆喰のみの層の存在が確定したことになる．しかも下地漆喰である場合は通常 1 cm前後で塗られるが，この場合は全体的に厚く塗られており約 3 cmにおよぶ部分もみられた（Fig.4）．

2.3 右側壁

右側壁には 3 つの壁画が存在する．後陣壁側の上段には「居並ぶ 7 人の司教」（以後，「7 人の司教」）が，そしてこの左下には「大天使ミカエル」（以後，「ミカエル」）が描かれている．これらの右隣に 3 つ目の壁画の痕跡が残るが，これも左側壁と同様に入口側に近いためかほぼ消滅しており，フリーズの一部（以後「フリーズ断片」）しか残っていない．また，この壁面に関しても描画層の重層構造は確認できず，左側壁に存在した漆喰のみの層も確認できなかった．

「7 人の司教」と「ミカエル」の両壁画の間には，ポンタータという足場を利用して上段，下段に塗り分けて描いたときにできる漆喰面の継ぎ目が確認できた．これがある場合は通常，下の絵が汚れないように上段から先に描かれることが多い [3] が，この場合も例外ではなかった．また，上段の「7 人の司教」と下段の「ミカエル」の両壁画に共有するフリーズ内に先のポンタータが確認されたことと，目視調査であるが，そのフリーズに使用された赤褐色の色が，使用された顔料の色調も経年変化の具合も同じであったことから，これらの壁画は同時に描かれたものと断定できる．さらに両壁画に描かれた円光の表現に注目しても，同時代に描かれた可能性が高い．なぜなら，上段の 7 司祭のものすべてが黒と赤の縁取りがされた黄色の円光で，黒の縁取りの中には白い点が一列に連なって円を囲んでいるが，「ミカエル」のものもこれとまったく同じ描き方がなされているからである．

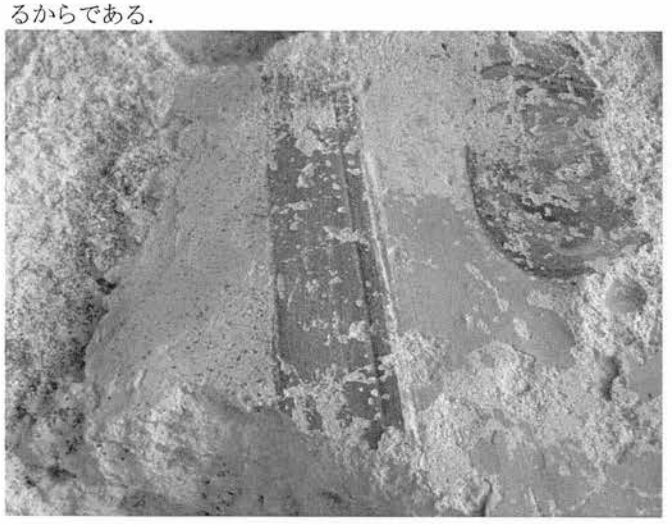


Fig.6　「フリーズ断片」の壁画（部分）

「フリーズ断片」には，おもりのついた紐を絵の具に浸しそれを弾いて垂直線の下絵を描いた墨縄の跡が見つかった．フリーズと同じ赤褐色の絵具のしぶきが飛び散っているのが確認される．さらに同じ場所に，紐を押さえつけてできたと考えられる細いまっすぐな溝も複数発見された（Fig.6）．これは漆喰がまだ軟らかいうちに描画の作業が始まったことを意味し，フリーズなどの直線的な絵柄を描く際の基準線として施されたに違いない．これらの技法は，本教会内の壁画にはここでしか確認できなかった．しかも，左隣にある「7 人の司教」の壁画に少し間がおかれて「フリーズ断片」が存在するので，「7 人の司教」，「ミカエル」の両壁画と「フリーズ断片」とは同じ時期に描かれたものとは考えにくい．墨縄の技法が採用された後者の方が，制作工程がシステマチックになっていることから考えても，明らかに 100 年単位で後年に描かれたことがうかがえる．「フリーズ断片」の壁画では，それまで修道僧が自ら絵筆を持ち壁画を描いた時代のものから，工房による組織的な制作体制のものへと変わったのではないだろうか．

また，両者の間には描写法にも違いが見られる．前者に関しては，平面的描写でしかも太い線によって輪郭をかたち取る描き方がなされているが，後者に関しては，わずかに残った衣の襞の表現がグラデーションを帯び立体感をあらわそうとする描き方になっており，強い輪郭線の表現は認められない．よって，この「フリーズ断片」の壁画はかなりルネサンスに近い 13，4 世紀に制作されたと推測できる．両者の間には少なくとも 300 年の開き[4]があるものと考えられる．

このように「7 人の司教」，「ミカエル」の 2 つと「フリーズ断片」の壁画には制作時期に開きがあり，教会の歴史の中で壁画が新たに追加されはしたものの重層構造が確認できないところをみると，右側壁においては壁画が描き直され改装された形跡はない．

2.4 後陣壁

先の両側壁に比べると，後陣壁の壁画の残存状態は若干良好である．しかし，そうはいっても壁の面積に対して描画層が残る面積の割合が多いというだけで，表面は汚れやカビがはびこり，今にも剥落しそうな描画層がいたるところに存在する．図像に関しては判別不可能な場所が多いが，幾分，刳り型後陣内のものは確認できた．また，図像の判別を困難しているのは，左右の側壁には認められなかった壁画の重層構造である．このため，古い図像の上に新しい図像が重なり下を隠しているのである．この重層構造は後陣壁の全面で確認された．それでは，左祭壇，右後陣，そして図像の判別が特に困難な刳り型後陣以外の壁面の 3 カ所に分けて，壁画の状態をみていくことにする．

Fig.7　後陣壁

Fig.8　左祭壇内に描かれた 2 つのキリストの右手

左祭壇には，「パントクラトールのキリスト」が描かれている．キリストの左目は盗掘によるものと思われるが，無残にも深い穴が掘られている．マンドルラの中の全能者はグレーがかった明るいブルー[5]に藍色で縁取りされた上着を纏い，親指と薬指をつなげた祝福の右手を胸元にかざした姿で玉座に鎮座している．左手には聖書を持っているはずだが，剥落による損傷や白カビの繁殖がひどく確認することはできない．座した全能者の左足は青い上衣がまくれ，中から黄色に赤で縁取りされた内側の衣キトンがあらわになっている．向かって左側にはキリストに向けて両手を差し出す聖女が描かれ，右側にも聖人の存在が認められるが，衣の描写が何とか認められるだけである．なお，左祭壇内の壁画は 2 層構造で，ここで述べた図像は全図像のほぼ 8 割を占める下の描画層である．つまり，より新しい時代に描かれた壁画がこの上層に存在するのだ．下層のキリストの首付近に上層の断片が残っているが，これには祝福の右手らしきものが描かれている．よって，上層にも「パントクラトールのキリスト」が描かれていたことは疑えない．

Fig.9　右後陣の下層に描かれた両手を挙げたマリア

右後陣には，中央には青いベールを纏った聖女が描かれている（Fig.9）．これは聖母マリアであることが残された記録によりわかった[6]．このマリアは下層に描かれており，マリアの頭上には上層の断片が残っている．これには円光と一緒に赤いベールが描かれていることが見てとれる．このことから，下層と同様に上層にも聖母マリアが描かれていた可能性が高い．もし，上層にも聖母マリアが描かれていたとすれば，マリアのベールの色が青から赤に変わっていることから，このリッジョ東教会は11世紀におこったキリスト教会の東西分裂後に，東方系の教会になったのではないだろうか．なお，マリアの両側には2人ずつ4人の聖人が描かれている．左側は「聖アンデレ」，「聖ペテロ」ということがわかっているが，右側に描かれた聖人は誰か不明である[6]．

右後陣の下層に描かれている聖母マリアについて，図像学的な見地から考察をもう少し進めてみることにする．マリアは両手を挙げ，また両脇に複数の聖人が描かれている．この図像は「マリア・オランス」を描いたものと考えられる．オランスとは祈る者，祈る霊魂を意味し，図像学的には立ち姿で両手を広げ手のひらを上に向けた姿で表される．これは最も古くて自然な祈りのポーズで，今日でも礼拝の際に司祭によっておこなわれている．ビザンチン美術においては，この図像がマリアの胸部にキリスト像のメダイオンを掲げたプラティテラ型聖母へと展開したとされている．

さて，層構造に関してであるが，左祭壇と同様に2層のみである．上層の描画層は全体のおよそ3割が残存するが，図像の詳細を明らかにすることはできない．

刳り型後陣以外の壁面では，正面左壁面に頭蓋骨と両足が描かれた断片（Fig.10，11）が確認できる．これは頭蓋骨がアダムの墓を象徴し，その上にある足は，キリストの磔刑図の一部に間違いない．左側にはそれらの図像と同一描画層のフリーズが確認された．磔刑図の場合は通常キリストが中心に描かれるため，この壁画は左縁のフリーズからキリストの両足までが約半分の大きさであったと想像がつく．つまり，キリストの両足の間から左フリーズの端までの距離が約54 cmであるため，このキリスト磔刑図は約104 cmの幅で描かれていたものと考えられる．

また，この壁画の下にはもう1つフリーズの断片が存在する．これはキリスト磔刑の描画面の上層に描かれた時代の新しいものであった．図像部分はほとんど残っておらず，その解明はまったく不可能である．このフリーズ断片を辿ったところ，後陣壁の左際いっぱいまであり，そして上部は天井から約20 cm程度下の位置まであった．横幅は不明であるが，縦が175 cmの大きさのフリーズ内に描かれていたことは間違いない．先に描かれた「キリスト磔刑」が完全に覆い被さるように漆喰が塗られ[7]，新たな壁画が描かれたと判断できる．

正面左壁面以外の後陣壁には，幾人かの聖人たちの存在が確認できる他は，円光やフリーズそして衣を纏った人体の一部が描かれた断片が散在するか，右後陣の上部壁面のように例え描画層が比較的大きな面積で残っていたとしても，損傷や汚れ，

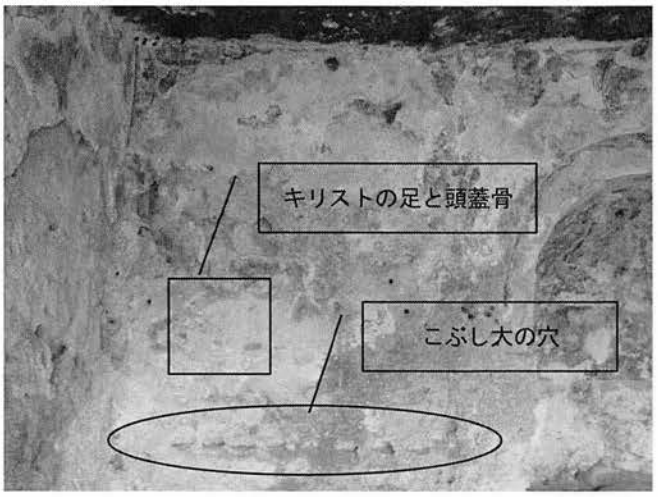


Fig.10　正面左壁面

Fig.11　キリストの足と頭蓋骨（正面左壁面）

Fig.12　後陣壁の正面左側壁における3層構造

さらには描画層の重なりによって図像を明らかにすることはできない．しかし層構造に関しては，正面左壁面の右側に3層構造（Fig.12）が確認でき，特筆しなければならない．両刳り型後陣を除く後陣壁においては，部分的に少なくとも2回は壁画が描き直されたということになる．3 層構造になった最下層の部分は，正面左壁面上にほんの小さな断片が数カ所表面に見えるだけで，他の場所をくまなく探してみたが，その手がかりとなるもの発見できなかった．

層構造を詳細にみてみると，凝灰岩の壁体の上に最初に描かれた最下層があり，その上に粗めの砂が混入された漆喰のみの層が分厚く塗られている．次に中間層が約1㎝弱の厚みで存在し，さらにその上に最上層が2，3㎜の厚さで塗られ，今にも剥がれ降りそうな危うい状態で所々に散在する（Fig.13）．上の層を取り除けば最下層の壁画が現れると考えられるが，当然それを見ることはできない．

重層構造が形成された理由としては，壁画が物理的に，または主題的に古いものになったからか，さらには宗派が変わったことも考えられる．しかし，最下層に限っては8〜9世紀におこったイコノクラスムが起因していると考えられる．その根拠として，壁画を新しく描き直すのであれば，当時は顔料に展色剤を混入したセッコ法によるものであるため，下地漆喰を必要とするブオン・フレスコの場合と違って漆喰のみの下地層は必ずしも必要とはしない．現にこの最下層には下地の漆喰層は確認されず[8]，凝灰岩の壁面に直に上塗り漆喰が塗られ描写されていた．また，記録によると当教会の壁画は10世紀[9]のものとされているが，これはおそらく後陣壁における3層の描画層のうち全面に現れている中間層のことを指しているはずだ．そのため，最下層はイコノクラスムがおこった8世紀以前のものであっても不思議ではない．イコノクラスムによって壁画が塗りつぶされたのであれば，左側壁にも分厚い漆喰のみの層が存在するので，この壁にも後陣壁における最下層と同時期に描かれた壁画が存在する可能性がある．なお，前述したとおり漆喰のみの層は右側壁には確認できなかった．

これまで，壁画の重層構造を壁面ごと個別にみてきたが，次には，両側壁と後陣壁の3壁面を総合的にみて共通する描画層ごとに整理することにしよう．

3. 重層構造の検証

各壁面の層構造を振り返ってみると，両側壁は1層，後陣壁の一部に3層構造が確認できるもののほとんどが2層構造である．まず1層のみである左右の側壁の描画層が，後陣壁のどの層と同じものなのかを見極めていきたい．

Fig.14 の写真をみると，左側壁の描画層は後陣壁の下の層に続いていることがわかる．つまり，前述した「キリスト磔刑」の壁画である．同様に右側壁をみてみると，「7人の司教」と「ミカエル」の間にはポンタータがあることは先にも述べたが，両壁画は同じ描画層であることに間違いない．これらは後陣壁にも続いており（Fig.14），後陣壁では2層構造のうちの，左側壁と同様に下の層にあたる．また同層は，右後陣内にも続いており先述した青いベールを纏ったマリア聖女の描画層と同じものである．さらに，右側壁から続く描画層は左祭壇内にも続いており，ここにおいても先に詳述した下層における「パントクラトールのキリスト」の描画層と同一のものである．

両側壁の描画層が後陣壁の下層と同一層であることを証明するもう1つの根拠として，後陣壁に複数存在する円光の描写にここでも着目してみる．右後陣内には下層に青いベールのマリアと4人の聖人の円光が合わせて5つと，上層に円光が断片の状態で3つ存在する．下層の円光と上層のそれとの描写はわずかに違っている．前者は先の右側壁の2壁画のものと同じで，黒と赤の縁取りがされた黄色の円光で，黒の縁取りの中には白い点が一列に連なって円を囲んでいる．しかし，上層のものには3つとも赤の縁取りが確認できない．

左祭壇の円光描写をみてみると，下層にキリストと彼の右手側に描かれた聖女の円光があわせて2つ，そして向かって右側に上層のものが1つ断片の状態で存在する．下層におけるキリストの円光描写は，右側壁の「7人の司教」と「ミカエル」の5つ円光と同じものである．しかし同じく下層に描かれたキリストの右手にいる聖女のものは，赤の縁取りの中に白い点が一列に連なっているもので，黒い線の縁取りは確認できない．

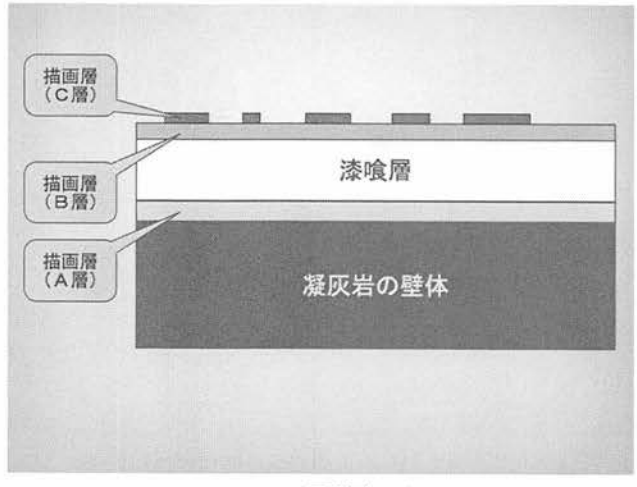


Fig.13　3層構造の断面図

Fig.14　層構造の分布図

刳り型後陣以外の後陣壁には 2 つの円光が確認できる．1 つは右上の角と，もう 1 つは正面左壁面の天井近くである．両者とも下層に描かれたものであるが，前者のものは前例と同じで黒と赤の縁取りがされた黄色の円光で，黒の縁取りの中には白い点が一列に連なって円を囲んでいるものである．しかし，後者のものには赤の縁取りが欠けている．

まとめると，同一層と予想される右側壁の描画層と後陣壁の上から 2 番目の描画層に存在する 18 の円光の中で，左祭壇内の聖女のものと正面左壁面にある円光の 2 つを除く 16 すべては，同じ描写法が採用されている．このことからも，右側壁の「7 人の司教」，「ミカエル」の描画層と 2 刳り型後陣壁内の下層の描画層は同時代に制作された可能性が高いと考えられる．

このように，左側壁の描画層は後陣壁の 2 層構造のうちの下層と一致し，右側壁の描画層も後陣壁の下層と一致する．しかしこれら両側壁から続く描画層は，後陣壁の上部中央付近から左祭壇の左側にかけて分断されており，右側と左側の上下の 2 層がそれぞれ同一のものかは精査する必要がある．先にも述べたとおり，両刳り型後陣内以外の後陣壁では図像の解明が不可能であるため，図像をたよりに左右の関係を見ていくことはできない．そこで，漆喰の塗り方に着目して検証する．

左右の上層の漆喰はかなり薄く，それが原因と思われるが，剥落が大変ひどい．先述したが，現在残っている部分も今にも剥がれ落ちそうで，しかも下層の表面が平滑に塗られた描画層の上に，荒らされ[10]ことなく直接上塗り漆喰を塗られているため，剥落状態が最悪なのも無理はない．しかし下層に関していえば，粗めの漆喰のみの層の上に描かれているので，壁面への保持はしっかりしたものである．これらの性質が分断された左右のどちらの側にも認められるので，互いの 2 層の描画層はそれぞれ同一のものであるといえる．

さて，この結果に基づいて改めて 3 層の箇所をみてみると，凝灰岩の壁体の上に直接最下層（以下，A 層）が塗られている．その上にかなり厚めの粗い漆喰層があり，次に中間層（以下 B 層）[11]の描画層が認められる．この B 層は先に確認したとおり，左側壁の描画層と右側壁の「7 人の司教」および「ミカエル」の描画層と同一のものである．さらに B 層の上には下地層が塗られることなく直接 2，3 ㎜の薄さで最上層の C 層が塗られている．これらの描画層をわかりやすく塗り分けて図説すると，Fig.14 のようになった．A 層が白，B 層がグレー，C 層が黒で塗りつぶされたところである．なお，正面左壁面に線で囲まれた 2 箇所は識別できなかった部分[12]である．

以上のことから，B 層は両側壁と後陣壁の 3 壁面すべてに存在し，その後に描かれた C 層は後陣壁のみに散在する．そして，A 層に関しては後陣壁の 2 つの刳り型後陣内には存在しなかった．したがって A 層は，刳り型後陣以外の壁面に描かれたものであり，全体にもっと広くの A 層が隠れている可能性がある．一方で，A 層のわずかな断片が残る正面左壁面の一部にのみ存在していたとも考えられる[13]．

4. 教会装飾のリフォームプロセス

教会内の重層する描画層が A,B,C 層に整理されたわけだが，いうまでもなくこれらは A 層から B 層そして C 層の順に最下層から描かれた．本章では，この壁画の塗り換えられた変遷を手がかりに，2 つの刳り型後陣を含めた教会内装飾のリフォームプロセスについて考察する．

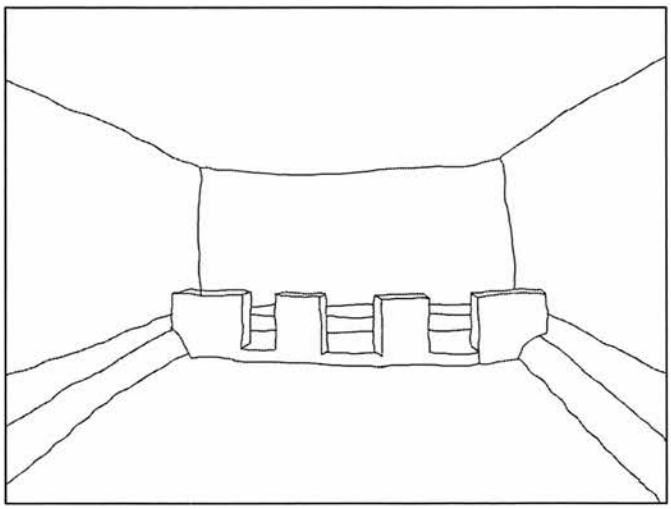
まず，後陣壁全体の構成に注目すると，正面左壁面にも刳り型後陣の存在を期待したいところだが，そこには存在しない．祭壇内における聖具置き場などの機能的な問題なのか，それとも 2 つの刳り型後陣をつくる際に，正面左壁面にはすでに A 層の壁画が描かれており，後陣を掘ることができなかったのかもしれない．しかし，後者であれば刳り型後陣がつくられる前のフラットな壁面に，正面左壁面のみに壁画があったとは考えにくい．もし後陣壁の全面か，もしくは現在残る断片部分を含めた中央部分に A 層の壁画があったとしたら，刳り型後陣がつくられる際には壁画の改装もおこなわれ，同時期に B 層の壁画が描かれたはずである．事実，これまでみてきたとおり刳り型後陣以外の後陣壁に A 層と B 層の間に厚めの漆喰層が存在する．これは A 層の壁画を改装する目的か，またはイコノクラスムによって壁画が塗りつぶされたのかは定かではないが，A 層の壁画の上から漆喰が厚く塗り重ねられた．その後，2 つの刳り型後陣が掘削されたことになる．

一方，A 層の壁画が描かれる前にすでに 2 つの刳り型後陣が存在した可能性も考えられる．この場合，祭壇内の機能的な問題があったと推測される．正面左壁面の下方にこぶし程度の穴が横一列に連なっていることは先に述べたが，ここに木の板を差し込んで聖具などを置くための機能的な場所が設置されていたのではないか．そうすると，設置台の上部壁面に空間が生まれるので，A 層の壁画が描かれたと想像できる．この場合は 2 つの刳り型後陣内には A 層の痕跡がまったく認められないので，壁画以外の板絵テンペラなどのイコンが存在したものと考えられる．

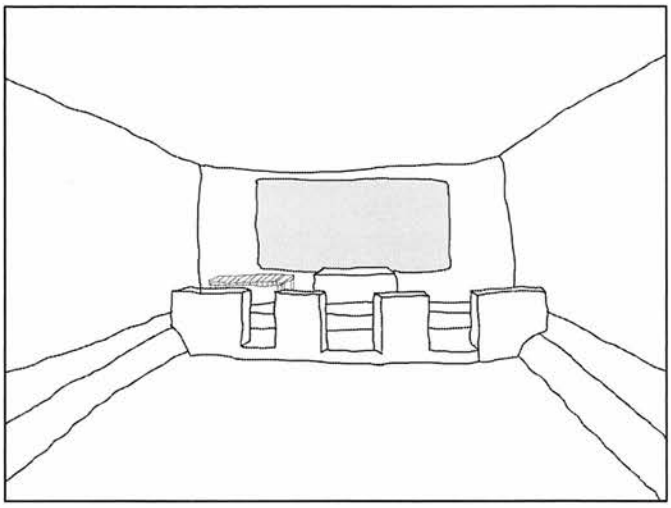
それでは，両刳り型後陣がつくられる前に A 層の壁画が存在した場合と，A 層より先に刳り型後陣が存在した場合の 2 つの仮説について，堂内のリフォームプロセスを検証してみたい．なお，上述した考察に基づいて検証を試みるが，限られたフィールド調査の期間で得た少ない調査資料をもとに考察をおこなっているので，以下ではこれまで以上に推測によるものが多く含まれている．その点をご容赦いただきたい．

4.1 A層の壁画が先の場合

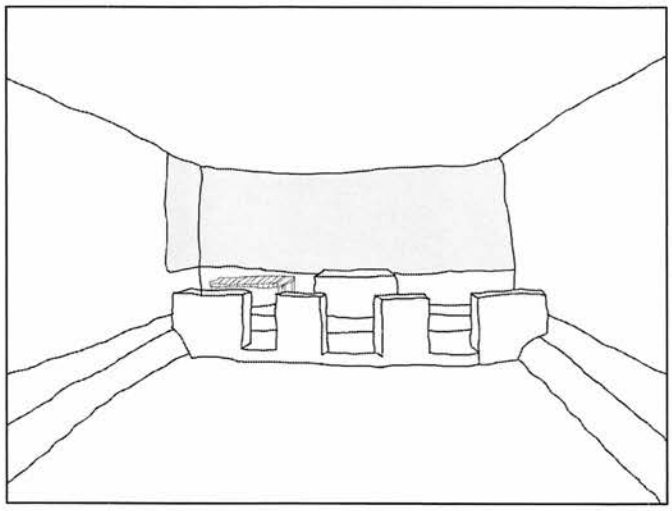
① イスラム教徒の迫害から逃れたキリスト教修道士たちによって，堂内空間が掘られた．その空間には両側壁と後陣壁の下方に全体を囲むよう段差が設けられた．また，イコノスタシスを仕切る間仕切りが加わり，この内部は身廊部分より床面が一段高くつくられた．



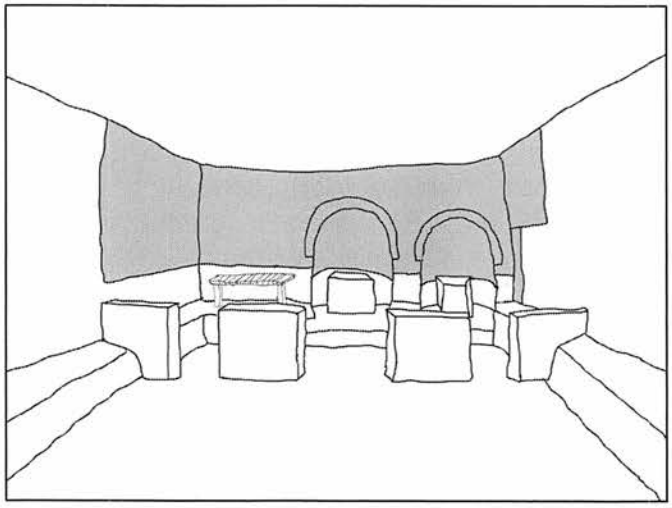
② 教会内の基本的な礼拝空間が整備された後，次に後陣壁中央にA層の壁画が制作された．この壁画の前には祭壇が置かれ，さらに正面左壁面には木材を壁面にはめ込んでつくられた聖具置き場が備えられた．



③ その後，時代は8世紀に入りイコノクラスムがおこった．A層の壁画は厚い漆喰によって塗りつぶされ，堂内は質素な礼拝空間に変貌した．

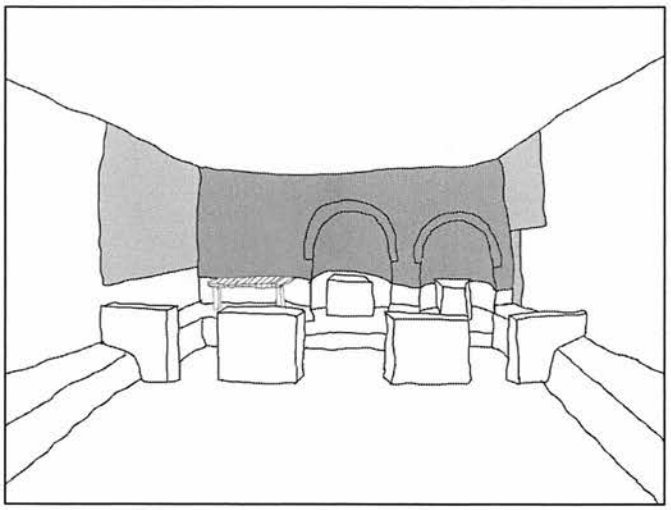


④ 843年に偶像崇拝が復活した後，10世紀に入り，それまで漆喰に覆われていた堂内に2つの刳り型後陣がつくられた．さらに，左右の側壁の後陣側と，両刳り型後陣内を含めた後陣壁の全面にB層の新しい壁画が描かれることになった．左祭壇内には「パントクラトールのキリスト」が，右後陣内には青いベールを纏ったマリアが，そして正面左壁面にはゴルゴダの丘で十字架にかけられた「キリスト磔刑」が描かれた．右側壁には「居並ぶ7人の司教」が後陣側上段に，「大天使ミカエル」がその下段に制作され，堂内は色とりどりの美しいイコンに包まれた礼拝空間へと生まれ変わった．また，この頃には修道士が増え，さらには禁じられていた偶像崇拝が解かれた反動でイコノスタシスの領域が入口側に拡張された．

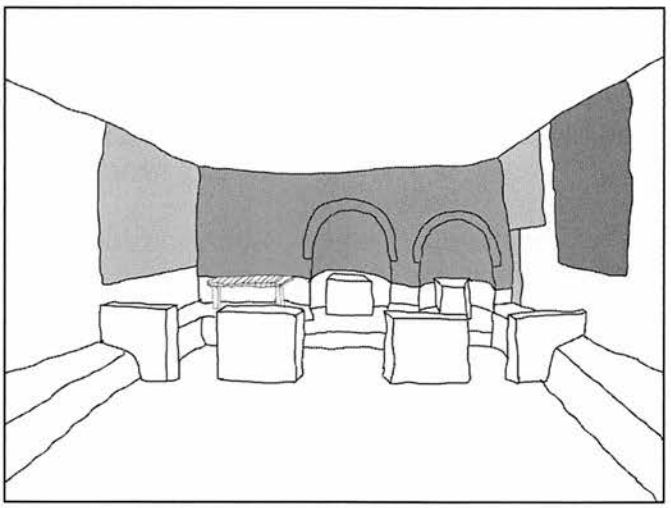


⑤ 時代が進み11世紀に入った．1054年にキリスト教会が東西に分裂し，このリッジョ東教会はギリシャ正教系の教会として再出発した．それに伴い堂内のリフォームが再びおこなわれ，後陣壁のみの壁画が改装されC層が描かれた．左祭壇内にはこれまでと同じ主題で「パントクラトールのキリスト」が描かれたが，ギリシャ正教の図像に則ったものに描き直された．そして右後陣内にも同じ聖母マリアが描かれたが，これに関しても

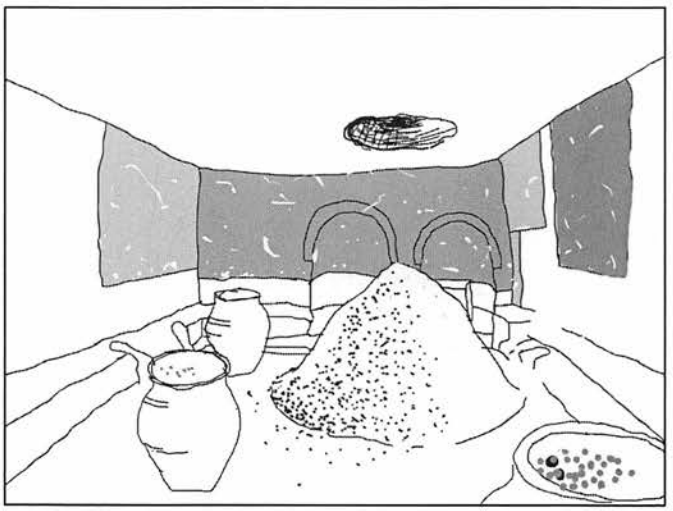
同教の図像にしたがったもので，これまでの青色のベールから赤いベールを纏ったマリアへと改装された．



⑥ さらに時代は進み 13 世紀に入った．ここで右側壁の中央部分に新しい壁画が追加された．それまでの壁画は修道士が自ら絵筆を握って描いたものであったが，この時代には絵描き職人のギルドが形成されており，イコンを手がける工房が存在した．この壁画も工房に依頼し複数の職人によって組織的に描かれた．

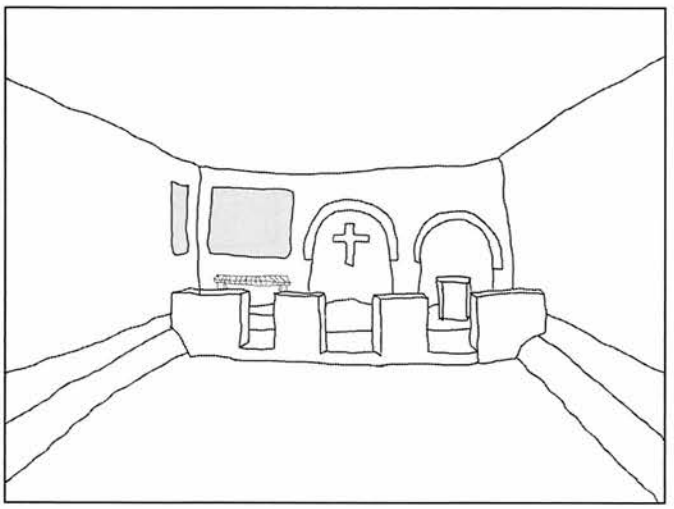


⑦ その後，教会は衰退し修道士は街の新しい教会へ移っていった．リッジョ東教会は教会としての機能がなくなり，所有者は近くの農夫へと移った．彼はオリーブを栽培しており，この洞窟教会を収穫したオリーブの貯蔵庫として使用した．イコノスタシス内や両側壁の下にあった段差は取り除かれ，間仕切りも撤去された．さらに天井中央部分には大きな穴が空けられ，その穴から収穫したオリーブを落としたり，精製されたオリーブ油をつり上げたりした．運良く壁画だけは壊されることなく残ったが，時を重ねるうちに少しずつ損傷し,今日の状態に至った．

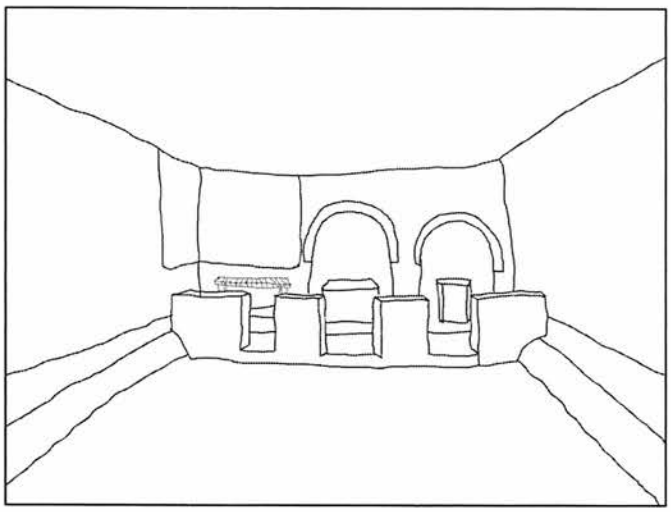


4.2 刳り型後陣が先の場合

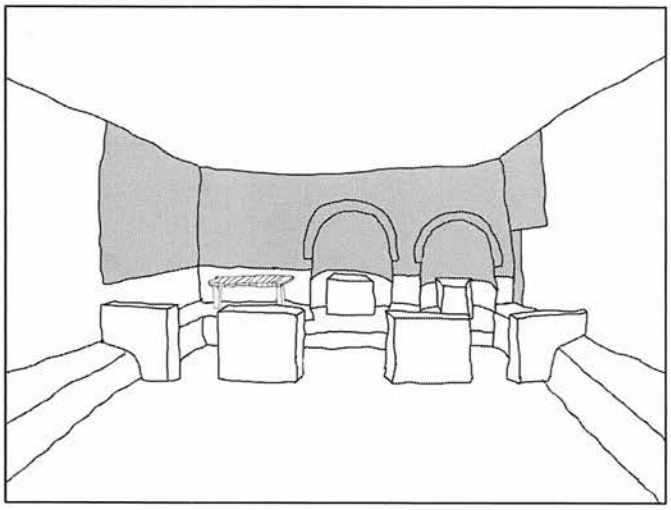
① 前節の場合と同じように堂内の基本的な礼拝空間が整備された後，後陣壁の正面および右側に，2 つの刳り型後陣がつくられた．中央の左祭壇は右のものより少し大きめに掘られ，中には板絵によるキリスト十字架像が設置された．また，もう一方の刳り型後陣内の中央には，掘削時に掘り残した立方体の石塊をそのまま祭壇として使用し，その上には蝋燭などの聖具が供えられた．正面左壁面には木製の聖具置き場がつくられ，そのちょうど真上に 1 つ，そして左側壁の後陣壁側に 1 つ合わせて 2 つの壁画が描かれた．



② 8 世紀に入り，イコノクラスムによって 2 つの A 層の壁画が厚い漆喰によって塗りつぶされた．左祭壇にあった板絵のキリスト磔刑像も撤去され，堂内は物寂しい空間に大きく変わった．



③ それから時代は9世紀になり，イコノクラスムが解かれた．それまで，修道士たちはイコンとしての具体的な祈りの対象がない中で，悶々として祈りを続けていた．しかし，偶像崇拝が復活したことで堂内に多くの壁画が描かれることになった．イコノスタシスの領域も大きく拡張され，以前までの質素な礼拝空間から色鮮やかな豪華なものへと変貌を遂げた．



④ 以降は前節の⑤以降の場合と同じプロセスを辿るので，省略する．

5. 保存修復の必要性と今後の研究の展望

本稿では，目視および写真による画像データを中心とした僅少な調査資料の中で，想像力を最大限に働かせた考察であった．そのため，理論的な裏付けが乏しく説得力に欠けるものとなってしまったことは否めない．しかし，ジョットによって確立されたフレスコ画の源流といっても過言ではない，イタリア中世洞窟壁画群の貴重な文化遺産が瀕死状態であるというその現状の一端を報告できたと考えている．そして，本稿がこれらの早急な保存と修復の実現への一助となれば，この上なくうれしいものである．さらに，イコノクラスムによって失われたビザンチン美術の壁画が，上述したようにもし漆喰によって塗りつぶされたとするならば，現在のディ・スタッコ法 [14] などによるイタリアの優れた壁画の保存技術を発揮することで，貴重な文化遺産を守りつつも，闇に包まれたイコノクラスム以前の美術史研究に光を指すことが期待できるであろう．

註

[1] 掘削痕 A-2 に関しては周りが浸食され明確ではない．

[2] 本プロジェクトチームの科学分析班によって解析

[3] ポンタータの継ぎ目をみると「ミカエル」の漆喰層が「7人の司教」のものに上から被さっているので，「ミカエル」が後に描かれたことになる．

[4] 記録によれば堂内の壁画は 10 世紀のものとされるが，壁画が塗り重ねられているので，どの層のものが当時のものかは不明である．現時点でほぼ全面にあらわれている描画層，つまり後述する B 層が 10 世紀のものであるとすれば，右側壁の「7人の司祭」，「ミカエル」の壁画も B 層にふくまれるため，ルネサンス的描写がなされた「フリーズの断片」の壁画との間には少なくとも 300 年の月日が経過していると考えられる．

[5] 描かれた当初は鮮やかな色だったのであろうが，経年変化によってグレーがかった明るいブルーに変色しているのか，それとも空の青と色の区別を付けるために，キリストの上衣に白を混入した明るい青であったのかもしれない．

[6] 本書第Ⅱ部-第1章を参照

[7] 写真では下層に描かれた「キリスト磔刑」の左端のフリーズの内側に上層の壁画のフリーズが存在し，「キリスト磔刑」の壁画を覆い隠してはいないように見えるが，上層のフリーズの外側にも描画層が塗られており，下層は完全に上層に覆われている．

[8] 下地の漆喰層の有無は，目視調査でしかおこなっていないので，今後詳細な科学的調査が求められる．

[9] 本書第Ⅱ部-第1章を参照

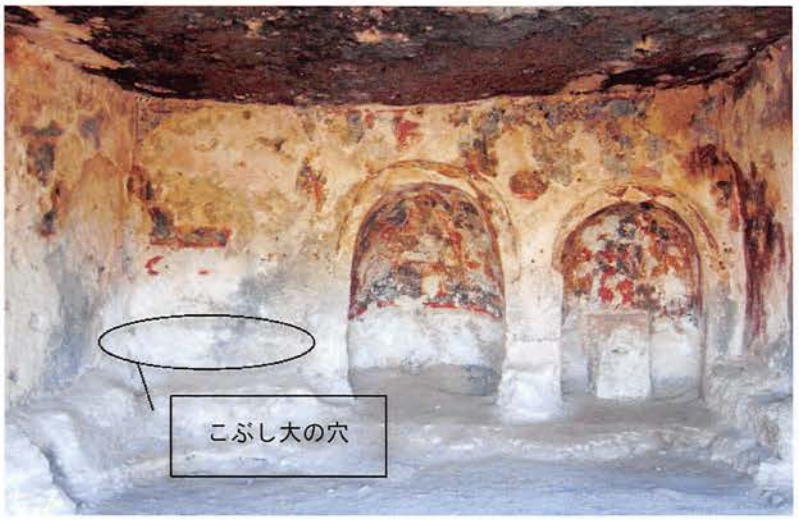
[10] 壁画が塗り重ねられる場合は，新しく塗る漆喰をしっかり固着させるために古い壁画の表面を荒らすことが多いが，当教会の場合は荒らさずにそのまま塗られている．

[11] 3層部分の中間層，つまり B 層はこれまですべての壁面で下層と表記してきたものということになる．

[12] 線で囲まれた不明の描画層は，磔刑図(B 層)のフリーズよりも下に位置するので，その後に描かれた C 層の可能性が高い．しかし，A 層の可能性も考えらので，ここでは断定することを避けた．

[13] 目視での調査であるが，正面左壁面以外の 2 つの刳り型後陣の上部などには，凝灰岩の壁面があらわになっている断面を詳細にみても，3層構造の手がかりが全くつかめなかったが，その場所に A 層が描かれていないとは結論に達していない．

[14] ディ・スタッコ法とは壁画を剥がして保存する技術のこと．描画層を上塗り漆喰ごと剥がす方法（スタッコ法）と描画層の最表層のみを剥がす方法（ストラッポ法）がある．



後陣壁

左祭壇

層構造（A 層：赤　B 層：黄　C 層：緑　不明：青）

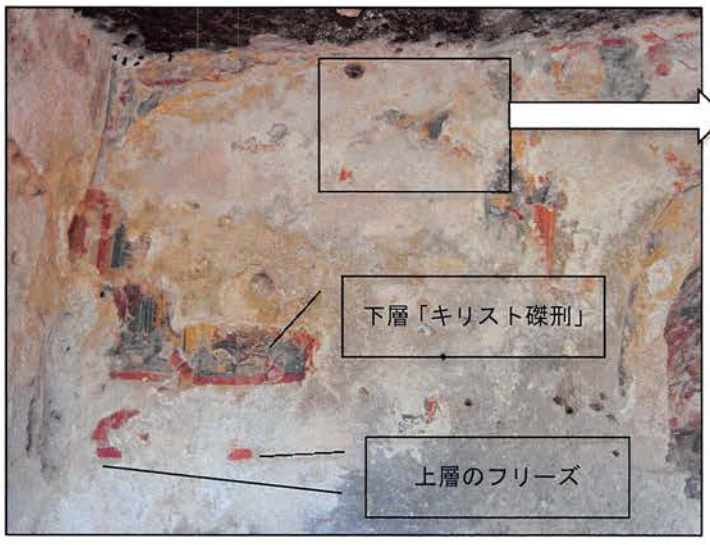
右後陣

左側壁右上に存在する分厚い漆喰のみの層

左祭壇下層（B 層）の祝福の右手と上層（C 層）の祝福の右手

（左）右側壁「居並ぶ７人の司教」、「大天使ガブリエル」,「フリーズ断片」

（右）右後陣内 両手を挙げたマリア（下層）、赤いベールと円光の断片（上層）



正面左壁面

正面左壁面の３層構造部分

右後陣の円光

正面左側面の下層（B 層）に描かれたキリストの足と頭蓋骨